

第4章 調査の成果と問題点

節田湊金久遺跡

発掘調査の結果、本遺跡は海浜に接した砂丘（新期砂丘）に営まれ、砂丘全域を生活の場として使用していた可能性は高いが内陸側の砂丘が削平されているため、今回の調査範囲では、直接古代人の痕跡を把握することはできなかった。しかし、同一の砂丘の一部では人工遺物の出土することが確認されており、砂丘遺跡のあり方を理解する上で貴重なデータを得ることができた。

昭和58年に県教委が調査した長浜金久遺跡も、本遺跡同様新期砂丘に営まれていたがここで注目されたことは、遺跡の規模が遺物包含地を発見した地点からの予測をはるかに上回っていたことである。調査では、砂丘の頂部や平坦面を生活面とし、主に採取・捕獲した魚や貝等の煮沸、貝の身を取り出すための作業を行い、海岸に面した斜面に食料残がい物を投棄していたことが明らかにされている。さらに、平坦面の一角から貝の身を取り出すために行ったと見られる作業の痕跡で、50cm四方のアンビル（台石）の周囲に夜光貝・シャコ貝・朝鮮さざえ等の大型貝や小型のマガキガイ等の破碎された残がいが無数散布していた。これらのことより、砂丘遺跡では地点により様相が異なることが予測されている。特に、新期砂丘を生活の本拠地とした古墳時代以降の遺跡では、小規模のまとまり（遺跡）が認められており、南島地域の砂丘遺跡の実体の解明が待たれている。

下山田遺跡

本遺跡は昭和59・60年に第1次の調査が行われたが、一部の未買取地が残されていた。今回はその残された地域の補充調査とし、第2次の発掘調査を実施した。今回の調査でも大量の遺物が出土し、土器片の中には1次調査の出土品と接合する可能性のあるものもあり、1次調査で不足していた土器の器形や文様構成等をかなり補充している。遺構では集石遺構を検出し、遺構の正確な配置を知ることができた。観察の結果、繰り返し使用したことがあがくがえ、また、2基が重複しているものも確認している。近年、琉球諸島や奄美諸島でも集石遺構の存在が増加しつつあり、面縄前庭式土器や嘉徳式土器等の時期に生活手段の一部として存在していたことの意義は大きいと言える。貝製品等は基本的に1次調査と同様の傾向を示しているが、今回は特に、排土をフリイに架けた結果、装身具と思われる製品を多く採取している。製品の中には用途の明らかでないものもあり、祭祀や信仰等も含め広範な解釈も要求されそうである。

以上、今回の調査の成果と残された問題点の一部を記したが、まず解決しなければならないことに、時間等の制約で今回は実施できなかつたが1次調査の出土品と直接比較検討する必要がある。これまでに出土している資料は、土器編年及び南島先史時代の解明に欠かせないものであり、将来の調査も含め統一した報告・見解を提出することが求められる。

附 説

奄美大島・笠利町節田の民俗地図

—記憶に描かれた場所と空間から—

高 橋 一 郎

目 次

- (1) はじめに
- (2) シマの概観
- (3) シマの境界と居住空間の区分
- (4) 小字の名称
- (5) 古層を伝承する場所と空間
- (6) 民俗行事に関わる場所と空間
- (7) 異界と結ぶ場所と空間

付 記

(1) はじめに

奄美大島北部は比較的に平坦な地形が多い故に、その景観の変容にも著しいものがある。ここで取り挙げる節田は、本土復帰（昭和 28 年・1953）以後の奄美にあって、重要な位置となって登場していく。昭和 35 年（1960）に始まる用地買収から、同 39 年（1964）の旧奄美空港開港がそれである。「洋上はるか離れた地域に新しい振興の息吹を与える」（南海日日新聞・昭和 39 年 6 月 2 日）期待のなかで、節田は飛行場のあるシマ（集落）として、最初の大きな変貌のなかに現れた。その後も、昭和 54 年（1979）から 60 年（1985）にかけての圃場整備、或いは平成 2 年（1990）の和野の新空港開港にともなう道路整備と、相繼ぐ改良事業の施行のなかで、その景観を大きく変え続けてゆくなかに節田は存在してきた。

こうして繰り返されてきた大地の変貌のなかで、シマとそこに暮らす人びとの伝承のなかに営まれた生活世界を尋ねることの困難さは増すばかりである。むしろ、こうした困難さを惹き起すように常に外に向かう空間が、人びとの身体を通して獲得される空間の意味や、理解され秩序だてられた空間を描き出す世界に対して、節田では常に外圧的に存在する空間が新たに嵌め込まれてきたことに注目する必要があろう。人びとが共有することによって社会化される空間が、同時にここでは人びとの空間の構想を疎外する要因を孕みな

がら存在してきたということである。このようにしてある空間のなかに、人びとの日常に抱かれた情景としてのありようを探ることは、その変容の背後に隠されたシマ社会の全体像に触れることにもなるだろう。

そこで、本報告は人びとに残された記憶を手懸りに、記憶が記憶たりえるために獲得する痕跡としての、営みの重ねられた空間や場所について照明していくことにする。この作業から人びとの記憶と忘却との錯綜を通して、自明のものとして了解されてきた空間や場所への様々な関わりから、シマと人びとの「生きられた空間」としての理解の図像を浮かび上がらせることがある。ここではその第一段階として、人びとの記憶を民俗地図という形を通して記述することにある。

猶、同調査は平成三年二月の、僅か一箇月足らずという短期間で、新空港道路整備の最終段階に入ったなかでの緊急調査であった。しかも、同時期は砂糖黍の刈り取りというシマの生活のなかで最も繁忙な時期と重なった。そのため聞き取りも非常に限られたものとなり、時間的制約とともに不十分な調査とならざるをえなかった。資料化への記述もそれだけ曖昧さを含むものとなり、それら点描の域を越えないものは、向後の調査の課題として残されている。また更に、節田同様の他地区の聞き取りも必要かつ急務な課題としてあることが痛感されたのである。

聞き取り調査のなかで協力頂いた方々の御名前と生年は次のとおりである。(生年順)

朝野 熊七	明治23年	日高 イト	大正6年
大山 前義	38年	奥 タツ	6年
朝 作秀	39年	東 稔助	7年
島 名ミツ	40年	奥 繁	8年
東 テイ	41年	郡 純忠	9年
浜 田 サネ	41年	東 チエ	10年
浜 田 常義	42年	郡 チエ	12年
島 名 実	42年	外園 テツエ	14年
島 名 アキ	43年	朝野 生	昭和2年
泉 タネ	43年	山田 チヨ	3年
大山 スミ	44年	大山 勝輔	4年
畠山 ヨミ	44年	朝 みや	4年
榎 善三	45年	島名 保允	8年
竹田 ミヨ	大正4年	泉 光秀	19年
榎モチヨ	6年	竹田 徳雄	22年

(2) シマの概観

節田は笠利町東海岸の広々とした台地を背景とし、海に向かって末広形に迫り出す台地に挿まれている。地質的にはこの舌状の緩やかな台地が、古生層の和野砂岩頁岩層と一部第四紀層の国頭疊層から成っている。人びとは台地に広がる畠地が岩ばかりだと語り、また幾つかの伝承の場がその台地上に沿って点在している。生活空間はこの台地の間に広がる沖積砂疊層で、海岸は発達した砂丘が展開する。居住空間は、この陸側からの台地と海側の砂丘とで囲まれた広がりとなる低地である。そこには西側にインゴ（犬川・現節田川）と呼ぶ川が流れ、かつて増水時には民家の半数近くが浸水に悩まされたという。また東側にもカミミチゴ（神道川）と呼ぶ川がある。まさに広々とした台地の窪みに二筋の川に挟まれてあるのが節田のシマの姿だと概観できる。

節田、即ちスィッタの地名も、豊かな湧水のなか、農耕儀礼などの供物としての稻を作る祭田、祝田の意味が考察されている。（岡山隆二、「笠利町歴民館だより」第35号・1990）だが、こうした節田の呼称に因んだ、古層へと導くノロ祭祀など民俗世界はほとんどが伝承の断絶のなかにあるのが現状である。現在、古文書などに残る節田の記述は、『南島雜話』（薩摩藩士名越左源太、高崎崩の遠島嘉永三～安政四年・1856～7の間に記述された國解民俗誌的記録）の「祭祀暇日」のなかに見出しができる。

「八月、笠利間切節田村、摩崎祭り、白酒を作る祝、節田村に限る。」

僅か一行余りの記述ではあるが、この「摩崎祭り」が「白酒を造る祝」であるということに注目できる。同書の「産物」にある記述と重ねてみると、それが良く分かる。

「神酒 一七、八歳の女子能く能く口を洗い、女子一所に集り、水にしめし置処の生米をかみくだき、桶様のものにはき、是を真の神酒と云。造り様はかみくだく処の生米を白続にまじへ、一夜置けば出来る也。 — 略 — 近頃は其法を改めて倭の白酒造りと同じ。倭の人きらひ候故に大和人に隠し造る。また今に古風を守りて二、三カ村造る村あり。」

現在もノロ祭祀を伝承しているシマには、儀礼の準備に欠かせないミキ造りがある。少なからずこの「摩崎祭り」と呼んだ祭祀も、ノロ祭祀との関わりで考えられるだろう。「節田村に限る」とある記述も、「白酒を造る祝」を保証する節田の背景を物語るものになっている。しかも米を噛み碎いての神酒が、同文書記述の時代には「古風を守りて二、三カ村造る村あり」とするなかで、この「摩崎祭り」のありようと意味の深まりが窺える。

また、このような記述に残される祭祀を営んでいたシマの背後には、広がる台地に盛り上がるようアマンジイ（奄美岳）の山が海上に見える喜界島と向き合ってある。ここには天降りした神が奄美で最初に訪れた地とする石碑の建立（明治34・1901）が、節田の人びとによってなされている。更に家の内では集った男女が対座し、互の手を叩き合う手振りとともに歌を掛け合う。豊饒の予祝に集う男女を彷彿とさせるような「正月マンカイ」が、現在では節田だけに保存、伝承されている。これらはともに、節田というシマ世界の

奥行きを物語るものとしてある。

現在の節田は、かっての米作りのとしての生業を砂糖黍へ移してはいるが、農業のシマの性格をそのまま継承している。その砂糖黍の収穫量は、節田だけで隣接の龍郷町の総量を凌ぐとさえ言われている。これも、恵まれた地形に培ってきたシマの姿を語る一面と言えるだろう。このことはシマの人口推移にも窺える。町自体の人口が一時期を除き減少し続けるなかで、明治末期と戦後本土復帰の急増そして戦争の影響での減少を除くと、明治期の人口をやや下回る600人台での微減増を繰り返している。これにはかって沖縄或いは喜界島や他シマからの入り込み者の存在や、それを可能としたシマの海を繋げる位置と考えられる。とともに、やはり節田が困難さを増したとはいえ農業を生業の基盤として人口の増加とそれに伴うシマの変容を保証し続けてきたことが大きい要因として挙げられよう。しかも現在は、土地の改良整備にともない。新たな入り込みの傾向も窺えるようになっているのである。

(3) シマの境界と居住空間の区分

集落は南に海を配して位置する。海岸に沿って東北の位置に和野、西に土浜、そして台地側の北西に平の各集落がある。奄美大島でのシマジマの境界には、ひとつの類型が指摘される。それは海に向かって三方が山に囲まれ、その山の水下がり（分水嶺）と海に迫り出す岬が、シマの領域を地形的に描き出すのである。だが節田を囲む地形は、こうした特徴あるものではなく、起伏のない台地の広がりのなかにある。そのために境界も、まことにそれを囲む台地を特色づけるような川や、川の流れで小さく浸食された地形の亀裂などに、局所的に把握されたりしている。

① ナビロ川

この川が和野との境界になっている。橋のない以前、ここは渡る時によく滑って転びやすい所であった。そうしたヌルヌルとした所をシマダチで「ナビルカン」と言い、ナビロとは滑って転びやすい川という意味で呼ばれている。

シマの人びとにとって、ここはケンムンなどの妖怪の出没地としても怖わがられる。ここを夜渡る時に転んでしまうと、鶴の鳴き声がするまでそこで夜を明かさなくてはいけないという。また昼でも転べば、鳥の声を真似なければいけないと言われていた。

古老のなかには「昔や、神様ぬかしおりる、歩きゅうん所あらん。ナビロゴから通じて海岸ち」と、語る人もいた。また、この川と旧空港のマツノヒラとの間には、場所が特定できなかったが、マツティタティと呼ばれ、喜界島と節田との間で火（マツ）を焚いて合図をしたという所があったという。往来する船への合図ではないか、と話者は考えている。

また、ナビロ川では石斧が偶然見付けられる（昭和40年頃・1965）ということもあつ

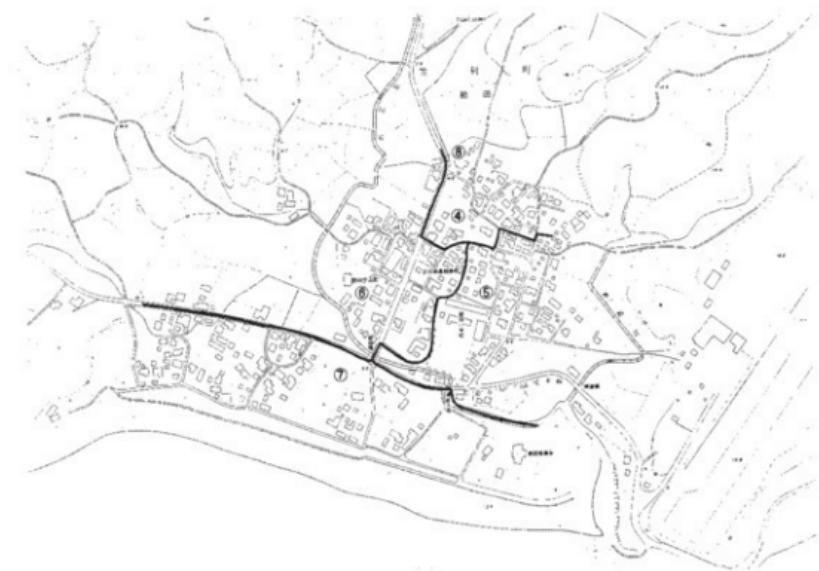


節田及び笠利町 人口の推移

	節田	人 口			笠利町	人 口		
		戸 数	男	女		戸 数	男	女
明治34年(1910)	125	320	345	665	2119	6509	6581	13090
大正元年(1912)	123	397	412	809	2129	6660	6832	13492
5年(1916)	125	383	381	764	1942	6896	7191	14087
14年(1925)	139	331	378	709	2376	5840	6651	12491
昭和6年(1931)	148	313	407	720	2398	5903	6950	12853
15年(1940) 18年(1943)	130 125	247 218	340 320	587 538	2200 2181	4517 4231	5850 5929	10367 10160
25年(1950)	昭和19~31年 不詳							12222
30年(1955)					2377	5127	6118	11245
32年(1957)	169	366	456	822	2389	5197	6205	11402
37年(1962)	179	407	468	875	2494	5400	6195	11595
	昭和38~40年 不詳				昭和38~42年 不詳			
41年(1966)	168	346	418	764				
45年(1970)	181	317	415	732	2510			10163
50年(1975)	181	285	352	637	2600	4367	5119	9486
55年(1980)	184	278	327	605	2769	4283	4858	9141
※ 56年(1981)	225	285 (21)	371 (29)	656 (50)	2817	4250	4855	9105
60年(1985)	257	309 (12)	372 (38)	681 (50)	2945	4286	4670	8956
平成2年(1990)	256	311 (9)	355 (41)	666 (50)	2884	3893	4271	8164

※印()内の数字は、特別養護老人ホーム笠寿園の入所者数

昭和18年まで「大島郡統計資料」以降町住民課の記録より



た。そしてこの流れに沿って、内陸の平集落の人びとが、節田を迂回し、海岸ヘイザリ（夜の漁）へと出る通り道にもなっていたと語られる。

② シュウシュ川

節田字フゥミナト（大湊）に流れる川で、海岸線の繋がりがそれによって侵食され途切れている。ここはシマの居住空間を遮るように海岸へと伸びる台地を越えた土浜集落と接する低地になる。土浜側ではここもケンムンの出没が囁かれる。更に出征などの見送りでは土浜集落をナードモリのクルイシとか呼ぶ所まで入り込んでいた。土浜から用安へのヒゴビラに姿が消えるまで、そこで踊り送ったと語られる。節田からも見えるこの土浜から用安の間の山にも、センコウマツ（線香火）が三つともったりする神様の山だと言われたりする。

③ テリヤドモリ

内陸側平との区境いの一応の目安になる。節田、和野更には北から内陸を貫く農道が交わる辻を、アマンジィへの山道が通る所になる。小字の呼称に平土盛と字を当てるこの周辺は、古くは平集落の土地に属していた。むしろ節田の領域が迫り出す台地の斜面下の限られた低地部分に過ぎなかったと言われている。これらの土地所有の移動は明治以降である。こうして節田集落の近代は土地の拡大とともにあった。後述の伝承にも土地売買に関わるような伝承がある。その一つでもある山を挿んだ田花部袋の所有もその過程でのことと言われる。

節田の人びとは平集落からイノビラと呼ぶ谷間の難所を経てテューブ（田花部）田袋へと、毎日農作業に出掛けている。この台地の反対側に位置する手花部集落の後背地の殆どが節田の人の所有である。以前行われた稲作りも主にここが中心で、節田では山裾など所々に田圃が点在した程度で、記憶のなかにはまとまった水田の広がりはなかったといわれる。

節田の人びとの往時の農作業の一日を振り返ってみると、午前3時過ぎにはネッサリ（朝御飯）の準備である。田植え時にはいつもより1時間程早い4時頃に家を出て、1時間程かけて手花部に着く。普段でも6時頃には着いて仕事に取掛かる。アサバン（昼食）には蒸したトン（芋）を、そしてヒンマの茶（4時の茶）を間に挿んで、日没まで仕事が続く。稲刈り時は日も長く7時頃まで働くという。帰宅後ユーバン（夕御飯）のカイ（粥）を炊き、これが翌朝のネッサリも兼ね、そして就寝が大体10時頃ではなかったかと語られる。

「こっちの人は、働くことは、人に負けてはならんちいう気が有りますから、あの人もこの人も一生懸命して……、八倉建たんばいかんち、そんな感じがあったもんですから、こんな高倉なんかは殆ど一軒ずつはあったですよ」と、シマの気風を交えて語られる。

こうした野良仕事の帰路、難所と言われたイノビラやアマンジィにケンムンマツ（妖怪

火)を見たなどと、数多くの不思議な体験が語られる。

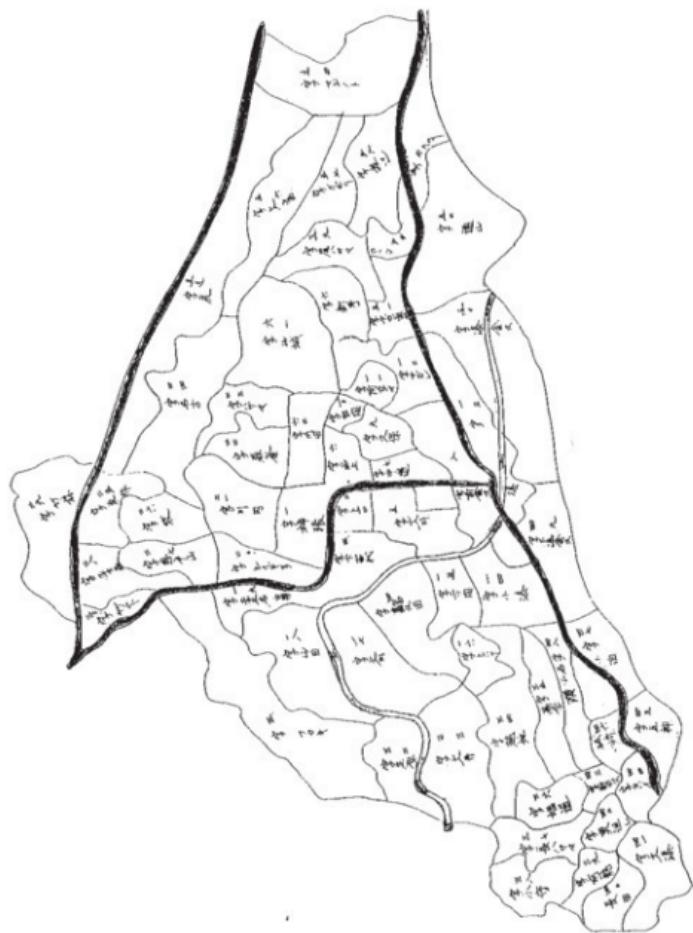
このように、節田と他シマとの区境いは川や辻など特徴的な場所に見定められ、同時にケンムンなど妖怪の出没が異界との境界でもあることを語っている。だが一方で、土浜や平との区境いは生活空間の広がりを背景に曖昧な変形を生じている。ここではイノビラ・ヒゴビラという山の坂道が、より強く人びとの情景のなかで異界としての意味を帯び、節田集落を更にその外縁で取り囲むような奥行きとなつて存在していた。

こうしたシマの領域の広がりのなかに、居住空間としての集合が描かれている。居住空間は浜辺へ出るハマジヨグチ、或いは波打際のシュウグチから、台地側は⑧のニシジョウと呼ばれる所が、その門口として意味を持っている。その間の犬川の東側に広がるのが、人びとのいう部落だった。そしてその広がりのなかに、このニシジョウから浜辺へとナミチが通っている。

シマは人々の集合ごとにボレ、現在は「組」で呼びわけ、四区分されている。シマで最も古い所とされるのが④シロマ(白間)ボレである。その下方に、東にあるからとも言われる⑤アガレ(赤連)ボレがあり、そしてそれに向き合うように⑥インゴ(犬川)ボレが、犬川(現節田川)を背にして広がる。浜辺の方を⑦ハマ(浜)ボレ・或いはクンニヤト(小湊)ボレと呼ぶ。四つのボレのなかでは最も民家が少なかったが入り込み者などの外來者の居住によって増加しながら現在に到る。この四区分で、行事などの寄付や、旧暦5月の節句のフナシイブン(船競走)、種下ろしの家廻りの踊りが行われる。現在ではこの四区分が戸数の減少のためシロマを含むアガレと、クンニヤトを含むインゴとに双分されたりする。こうしてみてみると、節田の居住空間が、本来東側の台地と犬川とに挿まれた低地を中心に展開し、次第に海岸の砂丘沿いに西側へと広がりをみせたことが窺える。このことを示すひとつの民俗事例にトリマデがある。

トリマデとは、家に鳥が飛び込んできた時、それは何かのムンシラセ(物知らせ)だと言われる。その物知らせとは人によって、死者がその晩尋ねてきて命を狙うとも理解されている。鳥が迷い込んだ家では、早速家の畳を裏返えしにし、その家の者だけではなく親戚も共に、浜辺に建つヤドリ(小屋)へ人に見られないように行き、そこで一晩過ごさねばならなかった。翌朝も人に見られないようにして早く家に帰り、皆でチャアヨレ(茶呑み)や三献をしたという。古老はこれを歎いだという。この一晩家を明ける時、必ず川を渡った向こう側へ行くことになっていると、シロマやアガレに住む人は語る。それに対して川向こうのクンニヤトに住む人は、川を渡ることなく、人の住んでいない所に泊まるのだと語る。

節田で川となると犬川と神道川に代表される。その川を越える越えないはシマの内と外という理解のなかにあることが分かる。穢れを清めるために人びとは一度シマの外に出ることが求められていた。このことは少なからず犬川と神道川によって画された内側がシマ



世界であったことを、トリマデの事例が示していると言えるだろう。また人びとが語るようには、そのなかでもシロマボレがシマで最も古い所だということは、シロマボレの多くの家々がジョウグチ（玄関）を海側（南）に向けて建ち、台地の裾から海側への家々の展開過程を推測させるようある。

(4) 小字の名称

図の如く 62 の小字でシマはその空間を呼び分けている。このうち民家が建ち並ぶ主な小字は、付された番号の 1~15 と海沿いの 47~50 にかけての地域と言える。

図中小字の 1 として記された桶張（オケバリ）は、阿麻美姑神社が祀られる 19 赤木名鼻（ハキナハナ）と呼ぶ舌状台地の下になる。シマではここをニシロ（或いはミシロ）と呼ぶのが普通である。この呼称の通り、「稻撒しうてい、田植しうたん場所あんかな、苗代ち言ゅんわけよ」と、ここ一帯が苗代田であったという。この上方にはタミキ（溜池）が作られ、そこから水を引いていたという。この桶張りという呼称も、樋を各田に張り巡らせ水を導いたことに因む桶張（トゥイバリ）が「樋」と「桶」の誤認などによって生じた呼称だろうと考えることができる。ここから 3 下苗代（シャアニシロ） 4 宮久田（ニヤアグダ）と、古くは水田が広がっていたであろうことが想像される。そのニヤアグダが昔は田園であったという伝承をかろうじて聞くが、シマの古老達の記憶は烟となった姿を語るばかりである。

居住空間のボレ区分を重ねてみると、シマでも一番古いと言われるシロマボレが 6 西上（ニシジヨ） 10 白間（シルマ）と、9 久保（クブ） 11 阿カンマ（アガンマ）の一部となる。アガレボレがその 9 と 11 と 12 アガレ、そして 8 前金久（ムガネク）の一部である。インゴボレは東側の 7 中道（ナミチ）に 2 上口（ジョウクチ） 5 犬川（インゴ）と 8 前金久 14 小湊（クンニヤト）を含む広がりである。このように字図を辿ってみると、この三つのボレにはそれぞれの苗代田が配されているのが分かる。シルマボレには 1 桶張があり、アガレボレには 51 アガレ苗代（アガレニシロ）、そしてインゴボレには 3 下苗代というようである。稲作の盛んなシマであったことが分かる。そしてクンニヤトボレが 13 湊（ニヤト）と海岸沿いの 50 湊金久（ニヤトガネク）、49 小湊金久（クンニヤトガネク）、47 小泊（コドマリ）と、砂地を意味するカネクに広がる様子が理解される。

こうした居住空間を取り囲むように、人びとのなかに多くの伝承をともなう小字が存在する。それらはシマの概観でも触れた末広がりの台地にある。東側にあって海に迫り出した形になる 52 通山（トゥリヤマ）、61 山城（ヤマグスク）、22 森笠（ムリガマ）また 19 赤木名鼻と平地に迫り出した舌状台地、そしてここだけは低地となる 15 一つ間（ティツマ）更に西側の台地を成す 48 石小積（イシクズン） 45 立神（タチガン）という具合に、そこからはシマの居住空間を取り囲むような孤状の連なりが描き出されるのである。

こうした小字図に浮かび上がるシマの空間は、先にシマの境界で述べた広がりと人びとの関わりのありようを教えてくれる。しかもその領域としてのシマの内と外とを認識するように浮上する伝承の存在が、現在に到る人びとの様々な経験を通して構想された空間を表現している。その表現された空間の背後に、シマがひとつ的世界としてシマと人びとの営みを現在へと繋げてきた潜在力を通してシマが宿す古層の貌が表出されると言える。

ではここで、そうした古層のありようへの照明の前に各小字に当てられた記述が、人びとのなかにどのように呼ばれていたものなのか、以下に紹介しておく。

- | | |
|----------------|----------|
| ① オケバリ | ② ジョウクチ |
| ③ シャアニシロ | ④ ニヤアグダ |
| ⑤ インゴ | ⑥ ニシジョ |
| ⑦ ナミチ | ⑧ ムガネク |
| ⑨ クブ | ⑩ シロマ |
| ⑪ アガンマ | ⑫ アガレ |
| ⑬ ニヤトウ | ⑭ クンニヤトウ |
| ⑮ ティッマ | ⑯ トンハナ |
| ⑰ フウゴ | ⑱ ヤマダ |
| ⑲ ハキナハナ | ⑳ シィギチ |
| ㉑ コチ | ㉒ ムリガマ |
| ㉓ ハサマ | ㉔ ナホ |
| ㉕ ハナザク | ㉖ マキ |
| ㉗ ムウトウヤマ | ㉘ テリヤドモリ |
| ㉙ テンヤマダ（ミチバサマ） | ㉚ タケシタ |
| ㉛ フカキ | ㉜ アッシャラ |
| ㉝ フケイ | ㉞ クィジ |
| ㉞ トンハナ | ㉟ シヨミチ |
| ㉟ ナバサマ | ㉞ コデラ |
| ㉞ マエコマリ | ㉞ ナガタ |
| ㉞ フウミナト | ㉞ ウクマシ |
| ㉞ スイッタマタ | ㉞ ユフイ |
| ㉞ タチガン | ㉞ イショザキ |
| ㉞ コドマリ | ㉞ イシグスン |
| ㉞ クンニヤトガネク | ㉞ ニヤトガネク |
| ㉞ アガレニシロ | ㉞ トゥリヤマ |
| ㉞ ユフタ | ㉞ マジノト |



- | | |
|-------------|---------|
| ⑤⑤ シリ（シリバル） | ⑤⑥ ホード |
| ⑤⑦ クビリ | ⑤⑧ ドレン |
| ⑤⑨ シリバサマ | ⑤⑩ シンヒラ |
| ⑥① ヤマグスク | ⑥② コオタ |

(5) 古層を伝承する場所と空間

どのシマにも神様が通る道、則ち神道（カミミチ）と呼ばれる細い道が今に伝わっている。この神道を塞ぐとよく障りが起きるということで、現在もそのまま残されることが多い。節田にもこの神道と伝わる細道を見出すことができる。だが一方では、この神道と関わったであろうノロ祭祀は、その伝承すら途絶えている現状がある。こうしたなかで、神道を手掛けにして、人びとが語った断片的なことがらをひとつにまとめてみることで、うっすらとではあるがシマの古層の姿を描き出してみることにする。

⑨・⑦ 神道

シマには二筋の神道がある。⑨はシロマボレを通っている。この神道はニシロの上になる台地⑩ムリガマから、アガレニシロの上になる⑪ムェダルと呼ぶ台地を結んでいたらしい。そしてその神道は、旧空港跡の台地沿いに⑫マザキへと通じていたようである。まず、この⑨神道を辿るなかで伝承を尋ねてみる。

⑩ ムリガマ

この台地は良くケンムンが出る場所と言って、恐れられていた場所だという。この台地の背後にタミキ（溜池）が作られ、ニシロへと水を引いていた。この台地には、珊瑚石が積み上げられた墓があり、その墓前には鋸びた刀が供えられていたのが目撃されている。またここは風葬の跡地で骸骨が多い所だと聞いている人もいる。一人の老女は「ムリガマには神様の木、アホギイの木が生えていて、人の骨を埋めてある」と言っている。現在ではそれらの痕跡はなく、鶴小屋があるばかりとなっている。

この積み重ねられた珊瑚の形状は、四隅を画し蓋をした箱型石棺墓であったと思われる。古老のなかには、「モリガマち言うのも、トネヤシキち言って、そこで神様が遊んでアガマナエシロのムェダルに行きよったち」と、父母から聞いたことを語った人もいた。ここが神通が結ぶ、ひとつの場所の始まりである。

⑪ シロマゴ

ムリガマから下り、民家が建ち並び始めた所にある井戸である。この周辺も以前は畑であったと言われ、「井戸もてんてんであって、うちなんかの子供時代までは、シロマゴち言っし、昔からぬ、シロマの人なんかが汲みに来とったち」と、大正期頃まではシロマボレの井戸として利用されていたようである。この井戸も2・3年程前に埋められ、その姿は既になくなっている。

⑫ ノロ神役の屋敷

ここは小字の呼称が用いられ、「クブのヤッ（家）」と呼ばれる。この家敷を境にシロマボレとアガレボレとに分かれる。このクブという呼称も、土地が全体的に一段窪んだ形になっているからだと言われ、川の増水など大雨になると最初に浸水する所だと語られるが、逆に最も風当たりの少ない場所にもなるのである。

現在、ノロの神役は継承されていない。その神役はオッカンノロとも言われる。神役の継承者が無いと災難があるらしいと、人びとは受け止めている。同家の子供達が不慮の事故などで亡くなったことも、シマの人びとはこうした脈絡のなかで理解している。継承されてきた神通具なども、継承者がなく家族に災いが起きるといけないということで、ニタ神に預け処分してもらったと言われている。同家が現在にまで継承しているものは、ノロ烟と同家の墓所とである。

⑬ ノロ墓

ノロ神役K家の墓所である。シマの人びとの墓所が古くは居住空間に近くあったのとは別に建てられており、その位置も居住空間の西外れの台地上と離れている。その位置はノロ屋敷からの対角線上にあり、喜界島を望む海とシマの屋並みとを一望できる所である。このK家も古くは喜界島から来たのではないかと、郷土史家などは考察する。

ここはKビキとOビキの墓所であったという。現在屋形墓四基、珊瑚板で四囲と蓋をなした箱型石棺墓一基、珊瑚礁を削って造られたと思える墓一基とが並んでいる。その背後には大きな岩が草叢に埋もれていた。この墓石のなかには謂れの分からぬのもあるということで、Kビキと分かるものはシマの墓所へ14.5年前に移したという。

⑭ ノロバテ（畑）

ノロ墓の場所から一段低くなつた一画に広がる畠地のことである。K家では決してこの土地を他人に売り渡してはいけないと、言い伝えられている。四、五代前のアヤという「ノロを拌んでいた」という女性は危うく人の手に渡りそうになった畠を、結婚もせずに働いて守ったと、同家では語り伝えられている。

⑮・⑯ トネヤ

⑯は現在民家となっている。道路を隔てたクブのヤッと並ぶように建つ。クブのヤッのブロック屏の一隅が開いているが、ノロ屋敷とこのトネヤを結んでいた跡ではないだろうか。

更に家々の建ち並ぶ間に沿って神道を行くと⑯がある。ここは人が住むと危険があるということで、現在は畠地となっている。「その畠には、昔神様が集まつた。私が考えますと、恐らくノロとかそういうのじゃないかと思います。」と、語られる。ここはシロマボレの外れに近い所となる。

⑯ シンヒラ

⑯のトネヤ跡近くから、図中破線の坂道がシンヒラの台地へ結ぶ。この一画も古くはモリで、鬱蒼としており、ケンムンなどの出没が語られた。このシンヒラは、字義通り新しく開墾した場所ということに因んだ小字名であろう。この台地に立つと、トネヤ跡、ノロ屋敷そしてノロ墓を線状で捉え、シマの居住空間全体を視界に収めることができる。ここがノロ祭祀に関わる聖地であったかは断言できないが、以下に「大島大官記」（『道之島代官記集成』福岡大学研究所）の明治三年（1870）の記録を提示し、その参考としておく。

「島中神山開方御國元ヨリ被仰渡、已夏貳拾八町余蘿開、追々唐芋地又ハ禿地ニ相成候、」

⑰ フーヤ

フーヤというと、シマの創家を示して語られることが多いが、節田ではそのような伝承を聞くことがなかった。ここは○ビキの先祖元の家になる。○家は笠利でも一、二を争うブギンシヤ（分限者）であった。その所有する土地の広さは次のような伝承となっている。

「田圃の真ん中に酒壺置いて、そこまで仕事したかあちゅうて、見届けるために、そこに埋めといて、それで、帰って来たら、『そこに、こう、こうゆう酒壺置いて、埋めたんじゃが、分かったかあい』ち、言うたら、『分かった』ちゅう人おらなかつたっち。」

そこまで行かなかった証拠があがっているわけよね、広いから。広いちゅう意味を表してるのでよね。」

この広大な土地は、七人の兄弟にそれぞれ一町歩位ずつ財産分けがなされたと語られている。その分家の一つである⑯には、鍛冶に使う鞴鞴があったと古老に記憶される。多くの家人を抱え、農耕に欠かせない鍛冶技術も独自に供えていたことが窺われる。しかもシンヒラを背にする位置は興味深い。

神道はこの家敷の片側に沿って抜けている。

㉑ ムエダル

⑨の神道が、⑩ムリガマからこの台地へと結んでいると言われる。神道の傍に住む老人が、「昔の爺ちゃんお婆ちゃんなんかが、（神様が）下りていらして通過したとか言って、昔はここ（神道周辺）はモリだった。その神道を通って、アガマナエシロの所に行っていたらしい、ムエダル。モリガマからHさんの家の前を通って行きよったらしい。だから汚なくできない。」と、唯一人ムエダルがノロ神達が向かった方向であることを語る。

㉒ アガレニシロゴのコモリ

アガレニシロゴを通ってカミミチゴ（神道川）に、そしてインゴと合流して海へ出る。その上流のコモリでノロ神達が水浴びしたと語られる。最近まで、水神様を拝む婦人がアマ

ミィズネ（ミズノトリの日）の健康祈願に訪れていたことが語られる。この水神様祈願の訪れには、シマを囲む湧水のそれぞれに婦人達が水浴びしていたと語られた。

㉒ スエカナ山

「そっちの山は神山ち、言っていたんですよ。昔、スィーカナちゅう人が首を吊って死んだらしい。だから、そっちをばスィーカナ山って呼ぶようになった。そっちで、その人が亡くなったから。」

人びとはこのいつ起きたのかは忘れられた一女性の縊死事件の伝承を共有しており、この付近を忌み嫌って近付かない。ここが神山であったらしいと多くの人が語るが、背後に旧空港が造成されるなか、その景観は随分と異なったものになっている。だが、ムェダルとは隣り合わせの所で、かつてはひとつの奥深いモリの姿であったことが語られている。

㉓ カミミチゴ（神道川）

スエカナ山の山陰になる湧水の流れである。現在はアガレニシロを流れる所も、この名で呼ばれている。以前は旧空港の汚水などが流れ込んで荒れていたこともある。まさにこの名称通り神高い場所として語る老女がいる。現在彼女はノロの神役のひとつ（名称不明）を継承している女性でもある。「ノロぬ神様ちば、我きゃ場合や、親でいーらが譲りいや。昔の親、子孫らが譲りい、うがしし、拝どぅんわけ。今あたんてい拝どぅわけ」と、集落での祭祀が絶えた今家に高膳を置き毎日朝夕拝んでいる。彼女はHビキの母からの神役継承と言う。この老女の記憶のなかで「空港ぬ縁なんていや、ノロ屋敷ちあっかな、神山ち言ん所」と語られる。「元ぬ空港ぬ前らが、水ぬ流れてい来ゅたんちょ、派ち。うん所ぬ川が、うしぬ上なんてい浴むいたあり、うれいやぬうあらんばよ、人間ぬ黒石ぬあん、石なんてい、座しゅてい、浴めたおりしゅん場所ち話や聞ちゅり、神高かんちょ」と語る。その川にある石が「うまや大盤石ぬあんちょ。ちゃっかな、座しゅてい遊ばれいん。うまが神様ぬ遊びゅん所ち」と、嘗て聞いたことがあるという。それは畠一畠程の大きな丸い石であったらしいが、現在それを見出すことはできない。

川の辺にあったという大石に上がった神様達が遊ぶ姿とは、ノロ神達神人衆による何かの儀礼或いは禊ぎを意味するものなのか、これ以上は分からない。だがこの川が同時に、現在のシマの人びとのなかに、「うん（空港）下にいば、流れ水あらんにし、水ぬ落していく来ゅん所なんてい、深ていかんガマぬあて、うまがアムミィズネちし、神様拝みゆん人や浴むい水なんてい浴めえんじゃ」と、水神を拝む幾人かの女性のアムミィズネに訪れる拝所となって語られている。また、これらのことと語った老女のアミゴ（浴み川）はアマンジの方へインゴの上流になる山間だと語った。

㉔ マツノヒラ

この道が台地を越えてナビロゴから和野への旧道であった。國では旧空港の滑走路となっているトクリ山からこの一帯はケンムンやビルワック（豚の妖怪）などの出没が語ら

れ、恐れられた所である。この②の場所には、この旧道を整備した時の石碑が立つ。「赤連組○念 昭和三年」の文字を肉眼でかろうじて読みとれる。このトゥリ山にかけての台地は、西側のコドマリの台地とともに、人骨が沢山あった所という。「道作った所にも、こんな立ったまま人が埋められとったち」と語られ、古老の一人は、「子供の時あすこのマザキとコドマリの所に人骨がいっぱいあったが、最近は減っているでしょうね。どっちが敵、仇だったのか知らんけれど、昔『乱れ戦』ち言うのがあってからに、あすこと、マザキとコドマリのあそこから戦争をしてからに、それだけの人骨が集まっているんじゃと。それはずっと古いじゃないですか」と語るのである。マザキとは、このトゥリヤマの台地のことを指し、コドマリとはシマの西側のもうひとつの台地のことである。「乱れ戦」という言葉も、シマの各場所から出る夥しい人骨について解釈しようとする大半の人びとの理解のありようである。

このマツノヒラの旧道も、⑤神道橋（昭和36年）のかかる道に、旧空港造成にともなってその機能を移した。だがこの橋の付近ではよく自動車事故が起こるのである。それも神道川やマツノヒラという人びとが忌避する空間への入口のようにあるからだと、受け止めている人が多い。

⑥ マザキ

トゥリ山の台地の鼻になり、大きな岩膚がアダンのなかに埋もれた浜辺である。この岩場には湧水がアミィゴとしてあり、「白衣に白馬乗って、水神様がお祭りしてた所があった」と語られる。「スエカナ山からマツノヒラは、神様が通りよったらしい。恐わかったですよ」という空間を、⑨神道はこのマザキへと結んでいた。「マザキ通る時も（火が）よく出よったらしい。この部落のなかからでも明かりをつけて通りよったのを見た事がある、夜。」と、二人の古老が子供時代にノロ神達であろう人びとが、旧暦の2、3月頃にマザキへと向かう明かりを砂糖焚きで砂糖小屋にいて見たという体験を語った。またインゴの川口近くには、潮が引くと沢山の雑魚が取れるコモリがあったと言われている。他シマでも雑魚の群を寄せよせたりすることに、或いは潮の干満で魚を取るカキの所有にノロ神の存在が語られるが、このコモリもそうしたものだろうか。

このマザキが、『南島雑話』に記述された「摩崎祭り」の場所と考えられる。喜界島を海上に見る位置は、トゥリ山の近くで喜界島との間を狼煙を上げて連絡するマツティタティと呼ぶ場所を配していた。既述したように親ノロK家も喜界島からの家筋ではないだろうかとされる。そして節田と喜界島との空間を媒介するようにマザキがあるのは興味深い。この浜辺でも海上を遥拝するかたちでのノロ祭祀を想像することができるのである。一方、マザキと線上で結ぶことが出来る喜界島の湾では、「全島の野呂が根神（神人）を随えて、湾内の御殿の鼻に集まり、盛大な祭を行った」（三井喜徳著「喜界島古今記」1965）と聞き書きされている。ここに浮かび上がってくる「摩崎祭り」と「御殿の鼻」の、海を



挿んで向こううようなノロ祭祀のありようをどのように考えてみるのか、ひとつの課題とも言えるであろう。因に元禄十五（1702）年の『大島國絵図』では、「せ津た村」・「ま崎」の記述とともに喜界島の「碗間切」（湾）との間に航路が結ばれ、「せ津たより鬼界島碗泊まで海上七里辰之介當ル」と記される。また今回の聞き取りでは採話できなかつたが、節田には流れ島伝承が語られていた。「むかし、ノロが流れている島を呼び止めて来た。手で招いたら喜界島がちょっと寄った。」（大林太良・「伝説・昔話」『薩南諸島の総合研究』所収 1969）。喜界島をユリ島・浮き島と呼び表わし、ノロ神によるマンユイが語られていた。

このようにして、⑨神通がシロマボレから⑩マザキへと一連の伝承される場所を、東側の台地に沿って照明することになった。ではもう一筋の⑪の神通からはどのような場所が見えてくるだろうか。

㉗ 神通

この神通はアガレボレとインゴボレのふたつを破線の部分を含めて、親ノロの家近くから西の方へナミチを越えたインゴの近くへと伸びる。

㉘ ニャー

㉙親ノロの家と通を挿んで向こうここはアガレボレのH家である。同家もノロの神役を繼承する家だと伝わる。この辺りもモリとなって鬱蒼とした所があったと言う。現在同家の庭となっている所を含むこの周辺がニャーと呼ばれ、広場になっていたと言われる。ニャーとは「真んなか」という意味がある。嘗ては、ここが親ノロの家、トネヤなどを配したシマの中心としての広場であったことが分かる。だが人びとの記憶のなかで、この場所が八月踊りなどの場所として語られることがないのをみると、シマの中心としてこの機能を失って久しいことが考えられる。

㉚ 神道に立つ石（石敢當）

インゴボレからの神通が一部ナミチに沿ってアガレボレへと結ぶであろうと言われる道の突き当たりにある。ブロック屏に組み込まれるようにしてある高さ1メートル程の石である。「そこ立てんち言うと、家に影響があるから、石を立てなさいと言られて立てておるわけ」とシマの人々に言われ、石敢當だろうと言われる。石敢當としては随分と形が大きいのが特徴である。この大きさも神道となる場所にあるからであろうか。他にも、シロマボレの⑫に小さな石敢當があったと言われる。

㉛ 共同集荷場（旧青年会場・ヨレヤ）

㉜ニャーがシマの広場として機能していたことを語る人はいない。多くの人びとが、ここで八月踊りをしたことを記憶する。ナミチに臨んではぼ中央に位置し、インゴボレになる。会場としての広がりはさしてなかったと言われ ㉝フーヤヌヤの庭先に土俵をしつらえて、相撲を観ていたことが語られる。このフーヤは加石太郎の屋敷であった。この

人物とは、明治34年（1901）にアマンジィに「阿摩彌姑最初天降地」の石碑を建立した発起人九名の中に、その名を連ねているのである。⑪が会場となるのも、同人などによる影響が考えられなくもない。現在は、⑫生活館でアラセツの八月踊りの円陣がくまれる。

⑬・⑭ 鎌治屋敷跡

神道に沿うように二箇所の存在を聞くことができた。この屋敷跡に家を建てたりすることは、災いを招くとして忌避される。⑬は現在空地にされているが、その隣家ではここが鎌治屋敷跡であることを、当初知らなかった。昭和16年（1941）頃に、同家の主人は一箇月程不明の高熱に悩まされ続けた経験がある。そして最近になって、三年程前今度は息子に口が歪んだりとの症状が表れた。そこで用安のユタ神に祓いを頼むと、ここが鎌治屋敷跡だということが分かった。同家の門口に近いため、知らずにそこへ踏み込んでいたための災いだと言う。そこからは金屎が掘り出され、「その鉄屑を海に投げて、後を振り向かないで帰っておいでよ」と、ユタ神に指示された。こうしたなか近所の古老も、以前ここが「鎌治屋の跡だからアダネ植えてあった」と語っていたという。今は整地された空地となってある。

⑮ 節田生活館（旧墓所）

ここがシマの旧墓所であった。昭和16年（1941）頃から⑯現墓所ができ序々に移された。生活館が建てられたのが昭和50年（1975）で、それまでは鬱蒼とした空間として恐れられた。丁度その墓所からの道の正面にも、⑰石敢當があったといわれる。

⑯ ティーツマ

⑯神道の延長を橋を渡って伸びる道のことをコデラミチと呼んでいた。そこに広がる空間の呼称である。小字名で「一ツ間」の字が当てられるように、「ひとつ家ぬある」ことに因むと人びとは語る。古くは七・八軒の家が建っていたが、大正期頃に他所に移っている。現在は七代続くというOビキの祖先元の家だけが一家建つ。この空間はシマでは一家の他は余り子供が育たないと語られたりして、そのティーツマの呼称が人びとに理解されている。

⑰ ティーツマの墓

ティーツマにある家と道を挿んで、小さなひとつの丘をなすモリである。その丘上には大きな珊瑚板の箱型石棺墓が、南西の方向を向く位置で背後の大きな岩の重なりを利用するようにして、三基程並んでいる。その傍にも荒らされたと見られる珊瑚板や屋形墓が草叢のなかに積み重ねられてあるのが分かる。丘上全体がかなり規模の大きな墓所になっていたと言える。

ここでの由来や謂れについては、殆ど手掛りを得ることが出来ない。ここがトネと呼ばれていたらしいと言う老女は、シマの各地に点在する墓には、遠い所から来た人「トオノチュ」—外国からの遠い人の意で話者は語るが、ここには唐の人という意味も重ねられる—

とかが埋められていると言われたりする話をするなかで、このモリについて語った。また古くからティーツマにある〇家でも、この墓については何も聞いていないと言う。恐らくこの丘の傍であろうティツマゴの湧水があつたらしい。〇ビキの古老の一人が「我きゃが、浴むいたん川くわよ。シルムズィアミィする人は、いっぱいおる」と、身体の弱い人が健康になると言わされたというアミゴのひとつである。

㉗神道の先にこのような墓群のモリがあることは、㉙神道がムリガマと結ぶようにあることと共に通している。しかも空間が描き出す図式はもうひとつの共通点を示す。ムリガマの下にはニシロの水田が広がっていた。そしてこのティーツマの上手は、ミャーグダの小字名が残り、昔は水田であった空間である。

ミャーグダの傍を流れるインゴも、犬川の字が当てられ人びとにとっても意味不明となっている。郷土史家などによる考察では、インを冠する場所、インゴ、インヤマ、インゴモリなどは本来ノロが管轄する所ではないかという。その意味では、先のノロの神役を継承している老女のアミゴが、アマンジイに近いインゴに流れ込む川の上流であった。また、同様にニシロを経てインゴへと流れるコタの上流でも、ヒキョマンの水浴び（後述）が語られるのである。少なからず禊をする場所を持った聖なる川としての意味が考えられる。

更にここでひとつの仮定として言及すれば、そのインゴの水を導いたミャーグダが、ノロ祭祀などに供える稻の祭田と考えてみることができる。ティーツマとは、一人の老女が語るようにトネと言われるようなその水田を管理し、祭祀にかかる家のあった所で、収穫された供米をシマの中心になるニャーのノロ家敷へと運ぶのが、㉗神道となって結ばれている、と推察してみることもできるのである。

このようにして、㉙・㉗ふたつの神道を中心に辿ってみた場所・空間の図式は、以下のようなシマの古層の姿と変動の契機を示唆するようである。

㉙神道の先にあるムリガマや東側の台地が、聖域としてのシマの全体を秩序立てる空間としてある。そこを基点にすると、シマは本来シロマボレとアガレボレのふたつに双分される全體としてあったと考えられる。それがシマの人口の増加、一方でのノロ祭祀の衰退などに併せて、开の位置に阿麻美姑神社の建立が契機となって、シマの空間秩序を東から北へと動かしたと言える。シマの人口推移に伺えたように明治末には人口の増加がある。そうしたなかで居住空間はインゴの氾濫原にも展開し、シマ空間全体を押し広げていったと考えられる。シマの中心であったニャーは新たな広がりのなか、阿麻彌姑神社を基点にしたナミチを介したアガレとインゴの双分へと転換することで、青年会場にシマの中心としての機能を移していく。このシマ空間の変容と、新たな秩序への組み換へのなかに、シマが双分の図式を残しつつ三分されていく過程がみえる。こうしたシマの変容



を支えうる秩序の源泉に、アマンジィの石碑建立があったと言えよう。その後シマは、その外部であるインゴの向こう側、則ちクンニヤトボレの砂丘に外来者の居住をみながら、現在の四分割されるシマ空間の原形を形成していったと考えられるのである。

こうしたなか、先のシンヒラにみるような台地の開墾は、人びとが神山と語る聖空間の背後へも広がっていた。この台地は岩が多く畑地として耕す困難が語られ、同時に多くの人骨の出土も語られ、旧空港の用地買収をも容易にした側面があるという。旧空港の出現は、シマ人と人びとの記憶に生きた聖空間を一変させるには充分であった。現在の人びとが描くシマの図式は、阿麻彌姑神社とナミチによって捉えられている。そのなかに、文書にまで「摩崎祭り」と記述されたシマでありながら、ノロ祭祀の断片すら記憶から絶たれたのも不思議ではない。そこには新たな記憶の生成としてのシマ社会が体験され描かれてきたからである。そして、嘗てのシマの聖空間は新たな外部との境界を機能した旧空港によって、その意味を象徴するかのように重ねられ、「ノロぬ神様ぬ拝まれいたん所や、今ぬ昔ぬ空港……」と、古老達の身体に宿されたシマの記憶となって現在に語られるだけとなったのである。

(6) 民俗行事とともにある場所と空間

行事は人びとが生きる世界の理解を、身体の表現として具現化したものである。それは営みの場や空間とともに共同体の記憶として蓄積され、シマと人びとの認識の枠組を支えた。こうした行事が廃れ、消え失せていくなかでは、人びとの記憶と忘却がその認識の枠組を共同体の無意識として通底させる。それ故、現実の変貌するシマ社会とは、昔が消失するのではなく、その見えない潜在力によって統合される世界が背後に横たわっていると言える。

ここでは人びとがよく語ったふたつの行事を中心にしながら、シマの行事と生活の全体を素描する。ひとつは既に消滅したヒキヨマンと呼ぶ初穂儀礼、そしてひとつは阿麻彌姑神社の祭りである。

農耕儀礼のひとつであるヒキヨマン、或いはシキヨマンと言われた行事は、シマが耕地整理によって水田が消失するまで行われていた。

旧暦6月、この行事を経ることが稻刈りの始まりを意味した。19日か23日頃とも言われるが、稻穂が色付いた頃に、各家は⑩ニシロの田—自分の田とは限らない—から稻穂を3本刈取り、ニシロを流れる⑪コタの水を汲んで帰宅する。サネンの葉に稻をくるみ、コタの水を入れた壇に差して運んだという。「稻の食い始めち言って、家に持つて来て、摺鉢に入れてコウタの水で粉にして、その汁を嘗めえん」、或いは「三穂ぐらいで御飯炊いた」と言う。これを「ミイグムイカムイハジメ」(新米喰み始め)と言う。残った稻穂は床の間に下げておくのである。

午前中に稲穂を持ち帰ると、午后にはこの一年間に生まれた赤坊のいる家では、カシキ（小豆飯）とガッキヨ（辣堇）などを持参して、コタの上流となる⑫ヤマグスクの谷間⑪へ行く。そこは丁度山間を水田へと水が流れ出る手前である。ここで赤坊に水浴びをさせるのである。それは、「川の水で子供を浴びす。一番始めにそなせんば、シルムィズ（井戸戸水）で行水できんからち」と、その謂れが語られる。その後、持参したカシキをそこで共食する。「ヒキヨマンすいらんうちや、ミズアミィすいんなちいし」と、この日のことが語られた。

初穂迎えと産水を浴びることに共通する生命を予祝する意味が、様々な農耕儀礼のながら残り、シマの行事となって保持されてきたのだろうか。このヒキヨマンは家単位での稲の農饌を予祝する初穂儀礼である。古くは共同体として支えたノロ神達の祭祀がトネヤでも行われていたであろう。それは他シマに現存するノロ祭祀にみるアラフバナ（新穂花）の祭りである。先の話者で、稲穂を入れて御飯を炊くのは、他シマでのシキヨマ、イニクレ、或いはウチキヘと呼ぶ同様の行事に聞くことができる。だが、もう一人の話者が語る、米を粉にして水に溶かして嘗めるという加工は、ノロ祭祀に用いるスダシミシャクと呼ぶものと同じである。これは家に残されたノロ祭祀の名残りなのかもしれない。

こうして、減反政策によって水田が姿を消すまで、節田ではヒキヨマンが行われていた。現在行事として行われているのは、かって田の虫を取るムシカラシ（虫枯らし）を行った旧4月の浜下れを、旧5月5日の節句に重ねて行う。以前はマーシィブン（馬競走）が浜を東から西へ走った。今は舟を沖へ漕ぎ出して戻るフナシィブン（舟競走）が盛んになっている。この日、古くは7組程のヒキ毎に浜での共食をしたが、今はシマ区分の組に分かれて行う。ヒキヨマンのあった旧6月は、阿麻彌姑神社からナミチに燈籠を立てる六月灯が今は盛ん、そして旧7月の盆行事と続く。

旧8月は、初ヒノエの日柄でアラセツをする家がまだある。このツカリ（前日）にミキを作り、当日はミキとマン（里芋）、カシキをオヤフジがナシ（先組）に供える。この日から8月踊りが⑯で始まる。そしてナスカフザメ（7日後）のシバサンにも、やはり前日にミキを作る。この日、門口には悪魔祓いの意味で、棘の生えたダダラギの枝を差す。このようにアラシツとシバサンともに前日ミキを作る。古くはアラシツから「ヤサガシ」と言って数日をかけて家々を踊り歩いたことを考えると、この二度のミキ作りに挿まれた7日間、シマは盛大な祝祭空間が現出したことを想う。『南島雑話』に記述された、節田だけが行った8月の「白酒を造る祝」としてあった「摩崎祭り」とは、この刈取った稲でミキを作るアラシツからシバサンの行事のなかにあったのではないかとも考察できる。

ここに昭和10年代の赤木名で聞き書き（新屋敷幸繁「奄美大島方言と土俗」第二冊1937）された八月踊りの歌詞がある。「アサシュミチャガリヤ ショチュガマヌォウユウエユノシュ ミチャガリヤ ゴボヌォウエウエ」（朝潮が満ちあがると焼酎釜のお祝 夜

の潮が満ちあがると御穂（稻）のお祝だ。)

著者は「焼酎釜の祝といふのは焼酎を自製して農作の祝の準備をする心持を祝と見たのであろう。つまり朝から焼酎を造りたてて夜の豊作祝を賑やかにするわけであろう。」と推定している。これは節田での「白酒を造る祝」を彷彿とさせる解釈である。また、その一方でこの「ショチュガマ」の八月踊唄は現在龍郷町秋名でアラシツに行われる、明け方のショチュガマと夕方の平瀬マンカイでの稻靈招来の儀礼をも想起させる。『南島雑話』には「元知弥賀麻、頓賀の日、—略—白酒を造り、是を祭る。祝文あり、名瀬間切にかぎり祭る也。」とあり、名瀬間切という地域の限定が語られる。先の八月踊唄も他シマから赤木名への伝播も考慮すべきだろう。しかし、当時71才の老女からの聞き取りは貴重である。これらもまた「摩崎祭り」の像を結ぶものとして考えておく意味がある。

さて、行事は十五夜祭りに前後するように、キノエヌの日柄でドゥンガとなる。この日にはミキを作らず、よもぎ餅を作り、³⁷現墓所への墓参りをする。日柄によって、旧9月の種下ろしに重なる時もある。モチモレ（餅貰い）とも言い、現在は集落の資金集めとして各家を踊り歩く。古くはホンニオロシとも言っていた（小野重朗「奄美民俗文化の研究」1982）ことがある。

「昔は、アガレ、インゴちて、夜通し踊りよったから、昔はアガレ、インゴだったけど、今は部落が大きくなって、シロマ、アガレ、クンニヤト、インゴちて、別々に踊ります。」

各組の家廻りのうち、アガレとシロマの順路を確認できたので図示した。シロマボレが⁴³から⁴⁴を、アガレボレが⁴⁵から⁴⁶を、一年毎に交代して振り出していく。

そして 古くは旧9月9日が阿麻彌姑神社の祭日としてあった。

廿 阿麻彌姑神社

ナミチがシマの中央を台地へ伸びる所に、字名ハッキナハナの舌状台地が迫り出してくる。神社はその台地の端でシマを見渡すようにある。台地の傍を⁴⁰ニシロヘと流れる川は、アマンジの裾野のティンヤマダ、字名でいうハナザクの上方から流れてくる。この川筋の上流にもアミゴの場所があり、先の神役継承の老女が訪れる場所とも重なるようである。その流れが平地にかかるムリガマの奥にはタミキ（溜池）があった。更にその上手にウムトゥ山と呼ぶ、木々の重なりで川の流れが覆い隠される鬱蒼とした一画がある。ここは女の子守り歌が聞こえるなどと、人びとに恐れられた所であった。地形的には台地の谷間を平地にさしかかる境界的な所である。そして川の流れはコタの流れとともにニシロからインゴに合流する。

こうして川の流れがアマンジとシマを結んで流れるように、アマンジと神社は「アマンジがあんまり高かんかな、下ち降るしゃんだろや」という関係で語られる。そして海上からのシマの景観では、神社の建つ台地とアマンジのある通称ヤツダケと呼ぶ山影

が、アテ（目印）になると言う。ヤツダケは沖合からのアテとして、そして神社の台地は沿岸を囲む珊瑚礁の切れ目が、船を浜辺まで導く通路となってある位置を示すようにあるのが理解できる。推察を許せば、ハッキナハナの上手になるウムトゥ山とは、海上の船に合図する火＝マティ（尊称ウマティ）の山の意味であったかもしれない。

神社の祭日は、毎月9の付く日とされた。現在は旧6月の六月灯と兼ねているようでもある。戦前は神月の旧9月9日、シマの人は一重一瓶で境内に集まり、相撲など賑やかに行われていたことが語られる。この時、一年の無事を感謝し、新たに一年の無病息災を祈願する願ノシ、願ダテを行った。最近では、この旧9月9日や9の日く祭日に参拝する人影も余り見かけなくなったと言われる。また境内では雨乞いが行われていたことが語られ、話者の一人は昭和2年頃のことを覚えている。

神社に祀られている御神体の丸鏡と同じものを継承し、祀っている家がある。同家の主人は、アマンジィに石碑建立を発起した一人、島名半五郎の孫にあたる。同家では、観音開きの扉に④の形を彫り込んだ手製の小さな木箱に収められてある。この鏡は、七夕の日に一回だけ磨くことになっているという。また同祖父はシマの世話役としても活躍した人物として語られた。これらのことは、神社とアマンジィの関わりを物語っている。

アマンジィは本来平集落の領域となっている。シマではアマンジィのことを次のように語る。「アマミコちゅう神様が最初に、お下りになった所。そういう言い伝えがある。それでその神様が、この山は少し低いなあって、宇検村の湯湾岳に、あそこになおった」と伝承されている。だが、石碑の傍に立つ解説にもある創世神話としてのアマミコ（女神）、シニレク（男神）のことについて、語る人は一人としていなかった。シマでは、アマミコ神が女神であろうと捉えられるばかりである。不十分な聞き取り調査ではあるのだが、天から降下するモチーフの天人女房譚の伝承なども採話できなかった。むしろ平集落の古老が先の川の上流に天降りした天女が水浴した「アモレウナグの足跡石」について語っている（立命館大学説話文学研究会『奄美笠利町昔話集』1986）。島建て神話の空間を配しながら、節田での伝承の奥行きが感じられないのは、アマンジィ周辺から節田に迫まる台地が古くは平集落の土地であったことと関係がありそうである。節田がシマ世界を拡大していくなかに、このアマンジィを編み込んでいく動きが想定できる。そうしたなかで、この台地でも雨乞いのことが、「アマンジィに登って行って、鍋の黒いヒグルを皆付けて『アメフシャ、ユウフシャ』ちて、踊りよったち。そこで踊って、焚木なんかうべてしまったんでしょうね。そうしたら雨が降ったとかなんとか伝ってましたよ」と、語られている。

アマンジィに明治34年（1901）に建立された石碑には、「阿麻彌姑最初天降地」と彫り込まれている。アマミコ、シニレクの天降りの地については、これまでにこの笠利と宇検村の湯湾岳との二説が郷土史誌のなかで論ぜられてきた経緯がある。だが先の伝承にみると、こうした背景を統合するかのように、今では笠利から湯湾への神の移動が語られて



いる。現在は、この石碑建立の発起人9名の名前がそこに残されている。「朝仲明・朝慶次郎・山田末熊・東清和志・東浦清・加石太郎・島名弥吉・泉貞興喜・島名半五郎・節田村村中」。これらの名前に挙げられた各ヒキには地着の家筋もあれば、また外来の家筋もある。例えば、Aヒキの老人は、「昔、親なんかから聞けば、内地から流れてきて、それから広がったって、そうゆうとったです。どっか大笠利かどっかに船が流れて来たかどうか、分からぬけど、親なんかがそんな話をゆうたのを聞いた」と、ヒキの始まりを語っている。

こうしてみると、9名の名前が意味するのは、在来者と外来者とがひとつとなって石碑建立を発起したことにあるようだ。既に述べてきたように、シマはインゴ、クニヤトボレに外来者を迎えて、大きく広がってきた。このAヒキもインゴボレのインゴ（犬川・現節田川）沿いにフーヤ（先祖元）があり、人々もクニヤトボレにかけて存在する。

このようなシマの拡大にともなう、新たな共同体の結衆の拠点が、アマンジィであり神社ではなかったのだろうか。クニヤトボレには糸満漁師として訪れ、定住した家もある。こうした海と関わる人びとにとって、神社やアマンジィは海上からのアテとしての意味が重要である。他方で農耕にも関わる雨乞いの場所でもあったことは、シマのなかで陸と海の意味が交錯する空間であったことを示す。ノロ祭祀という旧来のシマの秩序立てに入り込まない外来者の存在は、その祭祀の衰退とも併せて、更にひとまわり大きな世界で秩序立てを必要とした筈である。それが奄美の創世神話に関わることによって編み換えようとしたシマ世界の変動ではなかったのだろうか。

シマの古層の空間でも触れたが、旧慣秩序の再編の契機に、石碑建立に宿されたひとつの意味があったのではないかと考えられる。シマは柔軟にその変容を捉え、自からの認識の枠組を生成してゆく。その空間は、共にひとつの全体として在る共同性によって、その内に異なる様々を包摂することを可能とする広がりをシマと人びとの営みに構想し、編み出してきたのである。

(7) 異界と結ぶ場所と空間

異界との境界には妖怪が出没する。それはシマの区分で触れたように、シマをひとつの容器として捉える時の空間の周縁でもあった。だが同時に、神道を走るビルワックワ（豚の妖怪）が語られたり、日常の生活空間の隙間にも出現したりする。これまでの記述のなかで、鬱蒼としたモリであったとした場所は、必ず山に近い所でケンムン、シマの内をビルワックワの出没が併せて語られた所でもある。そうした不思議な、恐ろしい体験をする場所が、他にも語られる。その場所の殆んどが、シマの各地から出土する人骨や謂れの分からなくなってしまった墓所に近い所でもある。ここでは、節田のひとつの特徴とも言えるそれら人骨の出土や墓所の場所を照明することにする。

これまでの記述のなかで、居住空間の周縁から⑩ムリガマ、⑪マザキ、そして⑫ノロ墓を、そしてその内側に⑬ティーツマの墓、⑭旧墓所と⑮現墓所などを示してきた。その現墓所がまだアレチ（荒地）の頃、そこから海へとマックワ（馬）が走っていくのが見えたなどと語られた。疱瘡などが流行った時などは、ここにウーバリヤックワ（掘立小屋）を建てて病人達は隔離されたという。この砂丘が墓所となっていたのが昭和16年（1941）頃からである。その後各地から出土の人骨を墓所の入口付近に埋葬してあった。今度の道路拡幅工事で陶片なども混じり、トラック2台分になるそれら人骨が改めて掘り出された。

⑭ 旧墓所（現節田小学校校庭）

ここも⑯旧墓所とともに語られる。同小学校が簡易科小学校として発足するのが明治19年（1886）であり、明治期に墓所が⑰から⑯へと移されたことも考えられる。学校の裏手をマツノヒラからの旧道がアガレボレの道と交わる辻を、⑱ホジョグチと呼んでいた。この辻でも八月踊りを踊ったということが語られる。その辻を旧道は校庭を、つまり昔の墓所を横切るようにしてインゴ沿いに通っていた。ホジョ即ち不浄の名を冠する由縁である。

⑲ Aビキなどの旧墓所

旧道がインゴに沿うように通った傍にあり、Aビギを中心とした幾つかの墓が立っていたと言われる。ここはビルワックの出没もよく語られる恐れられた場所である。同様にやはり⑳旧墓所の下手となる㉑小学校校門の前辺りも、「アホギィっていう木には、なんとかという神様がおるちいうことで……、ケンムンのことじゃないですか」と、ケンムンやビルワックの出没が県道の開通する頃まで人びとに体験され、忌避される場所となっていた。

この傍にある現在の節田橋も古くはインゴが大きく蛇行する㉒に懸っており、マツノヒラからの旧道はそこを更に県道に沿うようにして、台地にさしかかって㉓の方へ伸びる道を土浜へと結んでいた。

㉔ イシゴモリの墓

先のコデラミチをティーツマのモリを経て行くと、丁度台地の縁になる草叢に埋もれて、珊瑚板を箱型にした四基程の墓が、一本松の根方に寄り添うようにある。2、3年前にユタ神に付き添われた人が訪れ、周辺をきれいに草刈りしていたことがあるというが、その人物をシマの人は知らないという。

この台地の下にはイシゴモリと呼ぶ湧水があり、水浴びや洗濯などクンニャトボレの人びとの生活の水場として利用されていた。

ここから西の方に広がる台地を㉕イワハカの一帯にかけて、字名はイシクズン（石小積）と呼ばれる。名称の示す通り礫や岩の多い場所だと語られた。この字名自体、「明治

10年、何か改良があってからに、その時測量してから字など線引きしてからに、そして小さな石が多い所だたからイシコズミってつけたという話です」と、その由来が語られた。これは明治11年（1878）から15年（1882）にかけて行われた大島郡地租改正のことを示しているようだ。

53 イワハカ

大きな岩を兀状にして組んだ洞穴状の墓であると、基盤整備でここを整地した人が語る。「曝首は全部海の方を見ていた。岩でやった洞窟はひとつだけ、奥行きは2メートル、広さは3、4尺あって、その人達が利用したかも分らん。曝首は奥の方であって、体の方の骨は手前」と、崩す前の内部の様子を語ってくれた。この付近には別に墓が四基程あったことも語り添えた。

「沖縄の人が死んだとか言うて、沖縄の人が戦でここに来た」とか、「イシグズミの所とトゥーリヤマの所で合戦をしたので骨がある」などと、「乱れ戦」という表現でここを語る人が多い。先のティーツマの墓でも触れたが、人びとの理解を超えてあるこれらの墓の存在は、古老が語る「外国人か何か分からん人をトオノチュ、オランダ人ち言いよった」という異人の脈絡のなかで語られ、「そこに行って、宝取りよったとか言いよった」と噂されたりもしていたのである。

54 ナガバテの墓

字名でコドマリ（小泊）にあるが、墓のある丘の周りに烟が長く広がっていることから、ナガバテと呼んでいる。この烟の所有者も昔からこの土地を他人に手渡してはならないと言われ、困難をしのいできたという。この近くには同様の伝承を持つ⑩ノロ烟があった。

木立の茂る小さな丘の上には、大きな岩を背に珊瑚板の箱型石棺墓が半ば土中に埋もれてある。他にも屋形型の墓石と普通の墓石が各一つあり、落葉で埋もれてしまっているが岩を取り囲むように珊瑚が重ねられている。この屋形型の墓は喜界島の方向を向くように立てられていた。全体の状況はティーツマのモリと似ている。

この丘と並ぶように⑯にも珊瑚板を積んだ墓があったというが、数年前に潰したと言われる。この他にも色々と伝承が錯綜しており、この周辺には他にも謂れの分らない古墓が木立に埋もれて存在するようである。人びとの記憶から遠ざかった墓を数箇所に点存させるこの台地の烟を、古くはキカイバテ（喜界烟）と呼んでいたという。この空間が喜界島を正面に望む位置にあるからか、或いは交通を物語るものか、伝承は多くを語らない。そのなかで、「喜界島の人が遭難して、喜界島が見える所に埋めてくれって言われた人を、葬られた人を拌んでいた」と、この台地にあるひとつの墓にまつわる伝承が語られた。

55 フゥザンムイ

キカイバテの台地の裾にアダンに囲まれて、重なり合う岩が穴のように口を開け、その

奥から水が湧き出ている。この湧水は決して枯れることがないと語られており、昭和初期まではクンニャトボレの人びとの水場として利用されていた。その後家々の庭先に井戸が掘られるようになって、水汲みにやって来る人もいない。現在は、アマミイズィネのアミゴとして、訪れる人が多い。というのも、他のアミゴの多くが地盤整備によって姿を消したためだとも語られる。時折、ユタ神が尋ねてくることもあるという。

この下の浜辺はかなりの岩場であったようだが、旧空港の造成にそれらの岩が用いられ景観を変えたとも語られる。今でも、**立神**にかけての砂浜にかなりの岩場が見られ、イザリの場所として人びとが夜来たりする。

57 タチガンのモリ

土浜集落へ向かう旧道が、シマの西側を伸びる台地の先を越えるようにある。この一画にある岩山の重なりは、非日常的な雰囲気を醸し出すような風景を現している。旧道はそこを迂回するように通る。昭和の初め頃、この岩山には風化して出来た岩膚の窪みに人骨が納められていたと言う。旧道を通る際にもそれが見え、人びとは恐ろしい場所として近付かなかったという。

数年前老人クラブによって海を臨む公園整備が計画された。だがその岩山の裾に広がる台地からは夥しい人骨が出て、計画を断念せざるをえなかつた程だという。その時、「タチガミの所にある骨は乱れ戦の骨では、と言っている。いっぱいあるから。沖縄か喜界との戦かは分らない。乱れ戦というのがいっぱいあったから、はっきり分からぬ。それは想像」と、シマの老人達は解釈したという。

58 タチガン（立神）

タギジャン・ダギジャミ（沖縄方言か）と呼ぶ人もいる。

人骨が出る岩山の台地の下になる。周わりを圧倒するように海上に突き出たこのふたつの巨大な岩も、台地の岩山と同様のものである。その異様な風貌が、この空間を意味付けているような感じを生む。また、周辺に広がる珊瑚礁と岩場は、夜の磯での漁イザリにはうってつけである。当然のことながら、夜の空間はここにケンムンマティ（怪火）を見たことなど、数多くの不思議な体験が、「頭膨くれいて、恐かんどうやあ」と語られている。

そのうち神様の唄声と、線香の火を体验した老女達の話を、二例挙げる。

「クルダン節・ウラトゥミの唄ちし、しゃったんわけ。神様が唄しゅんでしう。うちなんかの親が、神様が唄っておるから黙っておるんどおうち、ウラトゥミの唄は神様が唄っているから、指差したり、聴いたり、声出したらいけない。タチガンぬ石ぬ所で『ウラトゥミー、戻いくんな ウラトゥミ』。その唄聞いたから、イショ物ぬ取れらんかつた。」

「タチガンぬ方ややあ、磯ち行きゅんちしや、イザリ行きゅんかな、うんに見ゆんわけよ、三つい立ちゅんわけ。『うれいや、やっぱり山ぬ何かあんちゅっかな』、^{いし}我がうがっし

言しゃとう、『うまや神信仰ぬ所あんかな、うまや、うがっし、線香火拂みゆん所どお』
ち、昔人きゃぬ言たんわけ。』

こうして謂れの分からなくなつた墓所や、多くの人骨が掘り出される場所をもつた台地の端にある空間は、非日常を表してくる。この西側の台地に対して、㉖マザキをその端とする旧空港のある東側台地も、同様に空港の造成で夥しい人骨が整理されたという。それを全体の空間の中に俯瞰すると、アマンジをその頂点にして末広がりに伸びるふたつの台地に沿って、これらが見出されることが分かる。それは丁度節田集落を取り囲むようである。

さて、これらの節田の古層に宿されてきた人骨の一部を10数年前に、大学調査と称し学生等が持ち帰ったこともあるというが、その後の報告は音沙汰もない。南を向いた墓は琉球王府を偲ぶためのものだとか、管見の諸説様々であるが、現状は放置されたまま荒れている。向後これらに対する調査、保存が課題となることだろう。

以上シマの人びとの語る世界を、その場所や空間に沿うようにまとめ記述した。そしてそれらを民俗地図として描出することにした。その間の記述における意味の制約からは逸れることはできない。しかし、或る程度その空間の図式に節田集落の文化現象を籠めた風景の輪郭を、シマの人びとの構想し存在する空間とともに素描することができたのではないかだろうか。不十分な箇所は多々指摘できるが、それらは向後の課題としておきたい。

付 記

調査における、節田の皆様の多忙ななかでの惜しみない御協力に感謝します。同時に、皆様のシマを想う心の強さに、改めてシマを歩くことの意味を問い合わせることになりました。また、聞き取り資料の整理を手伝って頂いた元多敬子さん、調査の助言を頂いた笠利町文化財審議委員岡山隆二さんに、謝意を表します。

(1991. 3)

節田湊金久遺跡

圖版

一



節田湊金久遺跡遠景



近景 西側より

節田湊金久遺跡
(発掘前草刈り)



同
(草刈り終了後トレンチ設定)



同
(トレンチ発掘風景)





節田湊金久 2 地点



節田湊金久 2 地点

節田漆金久遺跡
(発掘前)



同
(雑木取り除き作業)



同
(雑木取り除いた発掘地点)





表土を取り除く



遺物包含層を求めて
砂丘を一枚ずく剥離



砂丘断面



発掘は進み
トレーナーの中にグリットを設定



遺物包含層は
ついに現われず



ゼロmになり水が…
砂も粗くなり旧海岸的になる



砂丘の形成状況を良く知る事ができた



遺物包含層が現わることなく
大規模発掘は終了する



上・下調査終了前 台風19号は奄美にも現場にも大きな爪跡を残した

万屋下山田遺跡

圖版
九



万屋下山田遺跡発掘前（第1区）



同（第2区）



1区 作業風景



2区 地側から



1区 マガキガイ出土状況



万屋下山田遺跡
1区貝層を少しづつ掘り下げる



貝の間から獸骨出土



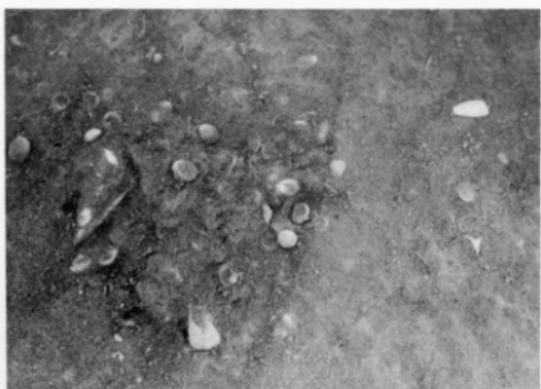
1区 灰が固くしまっており
遺物も砂・灰が附着している



1区 炉跡出土状況



2区 遺物出土状況



1区 貝だまりと骨製品出土状況

I区 貝だまり出土状況



I区 夜光貝製貝と出土状況



I区 牙器（ブレスレット）
出土状況



1区 遗物出土状况



1区 骨制品出土状况



1区 鱼骨出土状况



1区 大型具出土状况



圖版
十五

1区 土器出土状况



1区 土器底部出土状况





万屋下山田遺跡 1区



1区 西側遺物出土状況



2区 灰層出土

この下に集石遺構現れる



2区 発掘風景



2区 集石（西側より）



2区 集石出土状況



2区 集石が重なって出土



2区 集石出土状況



② アマンディからの
シマの遠景
(数字=場所の地図番号)



①ナビロゴ
(同)



⑨シロマボレの神道
(同)



⑩ムリザマ(右)ニシロ(中央)
阿麻彌姑神社(左)
(数字=場所の地図番号)



⑪親ノロの家(左)トネヤ(右)
(同)



⑫ノロ墓
(同)



⑩トネヤ跡
(数字=場所の地区番号)



⑪シンヒラからシマを望む
(同)



⑫メエダルからシマを望む
(同)



②スエカチ山（中央）
メエダル（左）
(数字=場所の地図番号)



③カミチゴ（中央）
(同)



④マツノヒラからシマを望む
(同)



②マザキノ浜辺
(数字=場所の地図番号)



③アガレボレの神道と
ニヤー(左)
(同)



④神道と石敢當
(同)



㊪-1 ティツマのモリ
(数字=場所の地図番号)



㊪-2 ティツマのモリ
(同)



㊫-1 阿麻彌姑神社の台地
(同)



④-2 阿麻彌姑神社の神殿
(数字=場所の地図番号)



④-3 アマンディーと節田集落
(同)



④-4 アマンディーの石碑
(同)



④コオタ（この水辺で赤子に水浴びをさせる）
(数字=場所の地図番号)



⑤ケンムンやビルワッカワの出没が語られた

(同)



◎イシゴモリの墓のある草むら
(数字=場所の地図番号)



◎イワハカの跡

(同)



④ナガバテの墓

(数字=場所の地図番号)



⑤タチガンのモリ

(同)



⑥タチガンの浜辺

(同)

節田湊金久・万屋下山田遺跡

笠利町文化財報告No.13

発行日 1991年3月31日

発行所 笠利町教育委員会

鹿児島県大島郡笠利町中金久52-7

TEL 0997-63-1218

印 刷 徳南西印刷

那覇市首里石嶺町1-127

TEL 098-884-4321